

KELES Newsletter

関西英語教育学会報 2020年度 第2号

事務局：〒582-8582 大阪府柏原市旭ヶ丘4-698-1

大阪教育大学 教育学部 教員養成課程 橋本健一研究室内

E-mail: kelesoffice@gmail.com 学会ウェブサイト: <http://www.keles.jp/>

2020年12月15日発行



関西英語教育学会 今後の行事のご案内

新型コロナウイルスの影響が続く2020年度ですが、関西英語教育学会では年度末に向けて下記の行事を開催いたします。皆様のご参加を心よりお待ちしております。

◆第50回KELESセミナーのお知らせ

第50回セミナーは「英語のアウトプットにおける指導と評価を考える」というテーマで、小泉利恵先生（順天堂大学）と山西博之先生（中央大学）にお話いただく予定です。詳細は学会ウェブサイトでご確認下さい。

日時：2020年12月20日（日）13:00-16:40

形態：オンライン開催（Zoom利用）

資料代：会員・非会員とも無料

講師：小泉 利恵 先生（順天堂大学）

「指導と関連づけた授業内スピーキング評価」

山西 博之 先生（中央大学）

「ライティングの指導と評価：理論と実践の視点から」

◆第24回卒論・修論研究発表セミナーのお知らせ

日程：2021年2月11日（木・祝）

形態：オンライン開催（Zoom利用予定）

参加費：会員・非会員とも無料

当日は卯城祐司先生（筑波大学）を講師にお迎えしてスペシャル・トークを開催いたします。卒業論文・修士論文を完成させた暁には、是非こちらで発表していただければと思っております。学生の研究指導をご担当の先生方におかれましては、発表をお勧めいただけましたら幸いです。発表申し込み締め切りは2021年1月22日（金）で、発表者はKELESの会員である必要はありません。

詳細は同封のフライヤー・KELESウェブサイトをご覧ください。

報告 関西英語教育学会 第49回 KELESセミナー

開催日：2020年9月27日（日） オンライン（Zoom）開催

新型コロナウイルスの感染拡大を受けて、今年度はKELESセミナーもオンラインで開催することになりました。第49回セミナーでは、「英語学習へ苦手意識を持つ生徒への指導～

中・高・大の教育実践から～」をテーマとして、大阪教育大学の加賀田哲也先生のコーディネートのもと、神奈川県川崎市立井田中学校の井上百代先生、大阪府立箕面高等学校の森

田塚也先生、そして近畿大学の牧野眞貴先生に、それぞれのご勤務先での授業実践についてお話しいただき、講師・オーディエンスの間で様々な議論が展開されました。講師の先生方、ご参加くださった約70名の皆様に心から感謝申し上げます。以下、セミナー全体の報告を記します。

第49回 KELESセミナー

「英語学習へ苦手意識を持つ生徒への指導 ～中・高・大の教育実践から～」

最初に、牧野先生が「英語苦手意識について考える」というテーマでお話されました。先生がリメディアル教育受講者に対して実施された調査結果から明らかになった学生の特徴は、①中学校で英語へのつまづきを経験、②英語恐怖症などのネガティブな意識を持っている一方で、③英語が話せるようになりたいという英語への憧れ意識も持っている点でした。また、学生が「英語学習意欲を高める要因」としてあげたのは、①信頼できる教師、②メリハリのある授業、③授業の学習内容が将来に役立つとわかること、④教師の熱意などでした。この結果から、教師がいかに重要かをフロア全体で再認識し、牧野先生は①やる気になる工夫をする、②学生に寄り添う、③英語力だけではなく人間性も高めるような教育を心がける、④教師は諦めない、といった教師の心構えをご教示くださいました。

次のテーマは、井上先生の「円滑な小中接続から英語嫌いをなくす～中1導入期のプロジ

ェクト」でした。英語嫌いを作らないためには、教師と生徒がゴールを共有すること、活動に意味をもたせて生徒自身が意味づけできるようにし、さらに成功体験に裏打ちされた自信をもたせることが重要だとお話くださいました。また、中学1年生を対象に5月時点で実施したアンケート結果からは英語が好きなお子が多いことがわかり、英語好きを嫌いにさせないことが大事だと説明されました。

続いて、森田先生が「ユニバーサルデザインの観点を取り入れた一般高校における英語授業のとりくみ」というテーマでお話されました。先生のご経験から、学生の発達特性を理解するために着席姿勢、指示反応、目線、取り組み具合、感情の起伏、音読など具体的な行動を観察することは、授業に生かせると説明されました。また、授業に変化をつけることが脳への良い刺激になるため、音読の場合なら立って1回、座って1回読む、という活動も効果的だと話されました。

最後に、「英語学習に自信を芽生えさせる大学リメディアル授業」というテーマで、牧野先生が“学生の自信の種をまくのが教員の仕事”である、と総括されました。

本日のセミナーを拝聴して、学生ファーストの視点がいかに大事かを改めて確認しました。教員は、つい授業が“うまく行った”、“うまく行かなかった”、と考えてしまいがちですが、学生が自信を得られる授業を丁寧に行えたかどうか重要だと痛感しました。

(報告者：京都産業大学 平野 亜也子)

報告 関西英語教育学会 第26回 研究大会

開催日：2020年11月8日（日） オンライン（Zoom）開催

関西英語教育学会では毎年5月下旬から6月上旬にかけて年次大会を開催していますが、今年度は新型コロナウイルスの影響で、規模を縮小して開催せざるを得ませんでした。皆

様の研究成果の共有の場や交流ができる場を設けたいということで、11月のセミナーを研究大会として開催することとしました。

3件の研究発表に加えて、KELES前会長で龍

谷大学の里井久輝先生に英語音声教育をテーマにした特別講演をしていただき、さらにシンポジウムでは新学習指導要領の理念に基づく授業実践について、大阪教育大学附属天王寺小学校の内田智佳子先生と神戸市立葺合高等学校の宮崎貴弘先生に話題提供をしていただき、本学会会長の泉先生と副会長の横川先生を交えてディスカッションをしていただきました。ご登壇・ご発表いただいた先生方、ご参加くださった約80名の参加者の皆様に心から感謝申し上げます。以下、特別講演とシンポジウムの報告を記します。

特別講演

「発音記号再考：英語音声教育を
さらに進めるために」

里井久輝先生（龍谷大学）

講演前の泉会長による講師紹介では「里井先生の言語感覚に圧倒される。日本語のダジャレと申しますか…」と言われていましたが、事務局としてお仕事を一緒させていただいていた報告者もまったくその通りに感じておりました。何度よい返しができなくて反省したことか…。

さて、この度の里井先生のご講演でも、「周囲からはノーモアと言われる」と言いつつユーモアたっぷり、先生の言語感覚に圧倒されながら多に学びを得る機会となりました。

里井先生は、英語音声教育を進めていく上で、1) 指導者・学習者にとって発音記号（IPA）がいかに重要であり、どう慣れていくべきか、2) IPAには私たちの思っている以上の情報を伝えてくれる、という2つのことを冒頭でまずまとめとして提示されました。

1) について、里井先生は、IPAをきちんと身につけることは、intelligibilityの高い英語音声が発することができるということ、それはつまり、国際社会で通用する判明度・明瞭度の高い英語音声を身につけていることである、と説かれました。「IPA…難しそう」との

向きには、日本語音声をベースに英語音声を増やしていくことでIPAを習得することは十分に可能であるとし、まずはIPAに慣れていくことが大事だと言われました。

2) に関して、子音や母音のsegmentalsについては、それぞれ26種をピックアップされた一覧を提示され、日本語に似た音がない音素を集中的に修得するのがよいと提案されました。教科書や辞書の表記をIPAで統一することが大事ではないか、と主張されているのですが、教員側の慣れや出版業界でさえも二の足を踏んでいるという、なかなか実現が難しい状況があるとのことでした。

また、発音記号は、個々の音声である分節音（segmental）を表記しているだけでなく、超分節要素（suprasegmental・prosody）の情報も伝えている、という点を強調されました。強勢の情報を伝えるだけでなく、強勢音節が英語リズムのビート（拍）を担うことからリズムの情報を、そして語アクセントにおけるピッチと強勢の関係からイントネーションの情報も伝える、ということでした。このことから、発音記号を用いて音節感覚・強勢感覚・リズム感覚を身につけることができるとし、たとえば小学校段階などの早い段階でも練習・学習が可能ではないかとおっしゃっていました。

超分節音素の領域の確認・練習の一つとして、「to buy or not to buy, that is the question」と言いつつDVDを即買いされたShakespeare Live! の映像を見ながら、俳優によってアクセント・卓立がどのように使われているのかを確認するという方法を紹介されました。

最後の質疑の際に、「教員が一旦IPAを身につけたら指導もできますよ」とさらっと柔らかく言われたのが強く印象に残っています。

「声も気も小さい」、「アクセントよりも悪戦苦闘」とおっしゃる先生ですが、英語音声教育をさらに進めるためには、教員の研鑽が大変重要であるとお言葉がぐさっと刺さ

りました。残念ながら時間の都合で、ではどうIPAを身につけて・使って、日々の実践に結びつけるのか、というところまでは至らなず、またの機会にと相成りました。

今回の里井先生のご講演を拝聴し、英語を指導する者としてIPAをきちんと理解・発声できるよう、また、音声指導できるように努力を重ねていかねばと痛感・反省しきりでした。

文章で里井先生の言語感覚の鋭さ、面白さを伝えようとしても難しいですね。多くの会員の皆さまには、またの機会に、是非とも対面で里井先生のダジャ…もとい言語感覚をじっくりと味わっていただきたいと思います。

(報告者注：「」はご講演内の里井先生のご発言の引用です)

報告者：大和 知史 (神戸大学)

シンポジウム

「新しい学習指導要領の理念をどう活かすか：児童生徒が目目を輝かせる授業実践の取り組み」

話題提供：内田 智佳子 先生 (大教大附属天王寺小学校)

宮崎 貴弘 先生 (神戸市立葺合高等学校)

ディスカッサント：泉 恵美子 先生 (関西学院大学)

進行：横川 博一 先生 (神戸大学)

まず横川先生より、育成を目指す資質や能力の三つの柱などについて実際の新学習指導要領の文言を引きながらご説明がありました。

次に、内田先生から小学校での実践について話題のご提供がありました。具体的には、English TimeとJapanese Timeによるメリハリのある授業計画、一人ひとりの児童の思考を無理なく促すクイズの導入、パペット等を活用して話す意欲を向上させる環境づくり、自己効力感を高めるまとめ活動、学年間のつながりを意識したカリキュラム作成、共同作業によるルーブリックを活用した自己評価・他己評価活動、タブレットのカメラ機能などのICT活用方法など、具体的で示唆に富む実例の数々についてご紹介がありました。実際の

授業の様子の動画等が豊富に交えられており、臨場感を持って指導の場をイメージできたことが印象的でした。

続いて、宮崎先生から高等学校での実践についてご報告がありました。活動を自己目的化することなく深い思考を促進する有意義な学びのための指導の必要性や方法について、3分間チャット活動やリーディングの発表活動(内容紹介と意見発表)といった実践の実例を踏まえつつご紹介がありました。「①活動を「生活の論理」に当てはめ、コミュニケーションの目的を持たせると、生徒は思考する。」「②活動を通して身につけてきたことを評価する「出力場面」が設定されていることで、本気に学習に励む。また、出力場面までに「中間発表」を位置づけておき、発表内容を修正する機会を作ると。生徒はこだわりを持つ。」「③自分の意見に「こだわり」を持たせる(自己決定させる)と、人に伝えたい思いが高まる。同時に、相手がどのような意見を持っているか知りたい気持ちになる。」の3点に集約されるメッセージが、それぞれ効果的な箇所でも示的に要約されていたのが印象的でした。

その後、発表の総括や議論のポイント・共通点などについて、泉先生が効果的にまとめられた上で、思考力・判断力・表現力を高めるためにどのような工夫が必要か、などの具体的質問について、これまでの全発表者やZoom参加者を交えて議論が行われました。

最後に挨拶をされた横川先生がおっしゃったように、新学習指導要領の理念だけが一人歩きすることなしに、いかに実際の指導の場において活かすのかということは非常に重要な検討事項です。その問いへの答えを一人ひとりの教育者が考えるうえで、様々な具体的実践例や最新の知見が盛り込まれ有機的に統合された本シンポジウムは、まさに知識的価値のみならずプラグマティックな示唆に富む珠玉のものでした。

報告者：金澤 佑 (関西学院大学)